
首輪付きが学園入り

D.L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首輪付きが学園入り

【NZコード】

N4031Y

【作者名】

D・L

【あらすじ】

ビッグ・ボックスでORCA旅団のメルツェル＆ヴァオーの2人と戦い
相打ちになり、死んだらトリップといつわけのわからないものが、
が、
よろしくお願いします。

注意！初心者なのでほんとに駄文に思いますが、温かい目で見ても
らうとうれしいです。

注意書き

初めてロ・」とこなます。

初投稿ですので、ものすごい駄文になると想います。むしろならないところおかしいです。

あと初心者でもあるので、書き方なども教えてくれるといいです。

自己満足のために書いたのでつまらないと思います。

読む方は一度深く考えた後に「ハラシュー！」と叫び倒した後に

もう一度深く考えてから読んでください。

それでも、読んでくださつたら本当にありがとうございます。むしろいいです。

拝んで崇拝したくなります。

注意書き（後書き）

これからもよろしくお願いします。

D
・
L

第一話（前書き）

「いつも D・L です。
おもしろくないと 思いますが、よろしくお願ひします。

第1話

作戦領域ビッグ・ボックス

メ「ORCA旅団メルツェルだ。」

メ「ビッグ・ボックスへようこそ。歓迎しよう盛大にな！」

ウ「レイテルバラッシュ ウイン・D・ファンションだ
一気に敵ネクストを叩く 遅れるなよ。」

首「了解」

ウイン・Dがガチタンと戦つていると
ウ「…火力だけか それでORCAとは、笑わ_s」 ヴア「ハツハア
」ウ「…すまない…撤退する」

（……え……なにそれ……）

ヴァ「ハツハア！」

まだまだいけるぜ、メルツェル!!」

ガチ_t…スピーカーが両背中と左腕のガトリングで、苛めてくる。
メルツェル?はライフルと大型ミサイルを使い分けて、苛めてくる。

（ちょ！ 待つ！）

AP70%減少

メ「用済みとなつて、尚ほくすか。」

(………… イラッシュ)

メ「憐れな駒だ。」

(………… イラッシュ イラッシュ)

メ「すべて終わつてゐるのだよ。」

ブッブン

首「口ロス」

右腕のMR R102（アサルトライフル）と左腕の—03 MO
シンガング
TORCobraで
スピーカーに八つ当たりをして、

ヴァ「へつ、ここまでか…悔いはねえ…楽しかったぜ…メルツ
エル…！」

ボコす

メ「…単純馬鹿が、死んで治るものもあるまい…」

メルツェルは両手のライフルを使い、
首輪付きは左背中のKAMALと右腕のMR-R102を使って戦
い、

メ「（ブツ、グフツ）…潮時か まあいい 最早私も無用だ 人類
に黄金の時代を。」

首「あ～俺ももう無理死ぬわ…」

（…すいません…セレンさん…）

第2話（前書き）

100%駄文です。

戦闘とかマジ無理です。

「めんなさい

第2話

職員室

・千冬 s.t.e -

はあ.....

「なぜ... 一夏がE.Sに反応している。」

「これからめんどくさくなるな。

「山田先生、政府の対応は?」

「世界初の男性E.S操縦者で日本人なのでE.S学園へ入学させるらしいです。」

「やはりそうなり ズドオオオオオオオ なんだ次から次に」

「アリーナに上空から何か落ちてきたそうです。」

「はあ 行くぞ山田先生。」

「わ、私もですか!」

「当たり前だ、行くぞ。」

「はいっ」

アリーナ内

「なんでしょうか?」

あれは……

「人だ、怪我をしている保健室に運ぼう。近くに何かあつたらそれも回収だ。」

「尋問は、後だ。・・ん、なんだ?」

千冬が男のそばにあるドッグタグを見つけ、

「HISだと! なぜこいつが持っている。」

IISを見つけ回収する。

ふたりは、男を保健室に連れて行き、そのあと一人でそのIISを調

べた。

IIS学園保健室

-首輪付きside-

(知らない天井だ。)

(「ここはどこだ、地獄じゃないのか、天国なのか。
ハッまさかアスピナの施設！ いや違うな俺、メルツェル？ と相
打ちにあって死んだし、
んじゃあここはどこだ？）

ガラツ

威圧感がやばい女性と、メガネのサイズが合ってないような女性が
入ってくる。

「起きたか、悪いがこちらの質問にも答えてもらひ。

「わかった、かわりにこちらの質問にも答えてもらひ。

「わかった、まず最初に聞くおまえは誰だ。あとなぜIISを持つて
いた。」

「リンクスだ。独立傭兵の、名前はない。周りからは首輪付きとかリンクスとか呼ばれてた。

カラードランクノ。6 そこ有名だったはずだ。ISなんものは、知らん。初耳だ。」

「知らんな。リンクスとはなんだ。カラードもだ。ISを知らんだと。」

威圧感が半端ない女性睨まれる。

「リンクスは、人型起動兵器アーマードコア・ネクストに乗ることができる人のことだ。

カラードは、傭兵やリンクスを管理機構のことだ。まじで知らんの？」（目が怖いよう……）

「ああ、そんなものまったく聞いたことがない。」

「まじかよ。なんなんだよこれ。イジメか？新手のイジメなのか？」

「知らん。とりあいずおまえらは傭兵か？」

「一応」

「あと何の目的であそこへ来た。」

「俺は企業連の依頼で、ORCA旅団の本隊を撃破しにビッグ・ボックスに行つて、メルツェルかなんかと相打ちして死んだと思って氣絶したらここにいたんだよ。んでこちらからも聞きたいことがある。」

「まずここはどこだ。天国か地獄か、それともアスピナの実験施設か？」

「ORCAがなんかは知らんが、ここは天国などではない。日本のIIS学園だ。」

「あれ？日本つて極東の日本だよなあ？」

「ああ」

「国家つて前の国家解体戦争で解体されてなかつたつけ？」

「何言つてゐんだ。」

「え？ あれ？ 間違つてたつけ？」

「現に」Jリは、日本だ。」

「うへん まあいいや んでJリってなんだ? 後、Jリ学園も。」

「Jリは正式名称インフィニットストラトス
宇宙での活動を想定されたマルチフォーム・スーシだ。」

「なにそれ? 聞いたことない。」

「はあ……話が全く噛み合ってないな。」

「えじやあこちうで起きたことを一通り話せてもいい。」

俺は、AC、ネクスト、ノーマル、MT、国家解体戦争、リンクス
戦争、企業連、ORCAのことや

国家解体戦争で国家が崩壊し、かわりに企業が世界を統治している
ことと世界はゴジマ粒子とこう

汚染物質で汚染されていて人類の過半は清浄な高度7000mの高
空にあるクレイドルいう居住用巨大
航空機に移住していることなどを話した。

相手側は、そのことについて全く知らずむしろ戦争はどれも起きて
いなく、ACなどについては、開発すらされておらず、ゴジマ粒子
も存在していないと言つ。

そして相手側は、ISについて話し女性しか乗れなくて女尊男卑になつてゐるけど先日、

初の男性操縦者を発見したこと、ISについては、軍事利用などをアラスカ条約で禁止されてゐることを話した。
もちろん俺は、ISなんて知らないし、アラスカ条約なんて初耳だと話した。

「どうあえず、お前はここに監禁せよ。明日また来る。
今日は、ゆっくり休め。」

そう言つて、一人の女性（片方確實に空氣だった）は部屋を出て行つた。

（おこおこおいおい、ほとんど初耳だぞ。なんだよISとか、女尊男卑？んなもんなになつた日なんてねえよ。）

（はあ…………もひやだ。疲れた。死んだと思つたら、変なところ来てるし。）

（なんだよ、ここがさかの別世界とでもこいつのか？…………やつかも…………）

（もう無理寝る。） N N N N N

「なんなんですか？　あの人、言つてゐる」ことが分かんなかつたんです
けど……」

「いや、その前に厄介な」ことが一つある。」

「？　なんですか。」

「まああいにほん、IIS適性がある、しかもA+だ。」

「ほ、ほんとですか！」

「あとあいつが倒れている近くにドッグタグがあつたんだがIISだ
った。

しかも解析がほとんどできなかつた。

分かつたのは、そのIISが未確認のコアが搭載されてたくらいだ。

「

「う、嘘でしょ、うー、何ですか？」

「さすがに私でもわからん。」

「はあ何でこんなに問題が山積みになるんだ。一夏といい、あの男といい。」

「あの人いつたいどこの人なんでしょう。未確認のコアを搭載されているISを持つていたり、変なこと言つ出したり。」

「あくまで私の推測の一つなのだが、山田先生は、並行世界や別世界などを信じるか。」

「あの世界はたくさん分岐していくつやつですか。」

「ああ、で私はあいつがその並行世界から来てこるとかんがえているのだが。」

「つまり、あの人が、並行世界から跳んで来たとでもいうのですか。SF作品じやあるまいし。」

「あくまで可能性の一つだ。私だってできるのならば、そんなことかんがえたくないが・・・」

「りあえず今夜は、徹夜でいろいろ調べるが、山田先生。」

「ええ！ほんとですか！」

- 首輪付き side -

こんな感じ？（アンサラ・ソルティオスオービット付き）
→ 134705 — 4390 ←

第2話（後書き）

駄文です。ほんと「めんなさい。
たぶん来週あたりから投稿がすごい遅くなります。すみません。

第3話（前書き）

第3話投稿をせてもらこます。

いくつかの「メントありがといひ」をいました。
うれしそぎて逆流しそうになりました。

でも抑えてハラショリーを連呼させてもらこました。
これからもよろしくお願いします。

-首輪付き side -

IS学園保健室

ガラツ

昨日の一人の威圧感がすごい方が入ってきて、

「お前の処置が、決まった。」

「んで、どうなったんですか。」

「お前は、ISの学園に入つてもう。拒否は無理だからな。」

「まあ行くあてないからいいんですけど。 なんで俺は何をすればいいんですか。」

「用務員ですか？それともなんかの管理とかですか？」

「いや、お前はこの学園の生徒として入つてもう。」

「へっ？ ほんとですか？冗談ですよね？
この学園つてE.S操縦者を育てるためですよね？」

「ああ」

「んじゃあ 乗れないじゃないですか？ 僕、男ですよ。
昨日言つてた男性操縦者じゃないんですよ。あとE.Sについてな
んも知らないですし。」

「それについては大丈夫だ。
調べさせてもらつたが、お前には、E.Sの適性がある。しかもE
Sも所持していた。」

「まじですかい。」

「もう二つ。」とだからお前には、ズキン　これを読んでもうつ。

「

「なんですか、この殺傷能力高めでものすごい分厚い本。」

「お前にはこれを一週間で覚えてもらつ。いいな」

「え？ こんなに…無理だ…覚えきれねえ…」

「覚える」

「ハツ…了解いたしました。！」

「…」はありとあらゆる國家、企業、法律の干渉を受けない。もつ有名無実化しているがな。

まあ…」にいればある程度は、大丈夫だろう。」

女性はケースから、『ストレイド』と書かれている。ドッグタグを出した。

「これがHSだ。」

「これ？ これって俺が持つてたやつじゃないですか。無かつたと思つたらつてこれですか！」

何でこれが、HSに…？ え…ビリビリ…ナニカサレタの俺。

「

「知らん お前が来た時に、近くに落ちていて拾つたらHSだったんだ。」

「まあ なんでかほとんど解析できなかつたがな。」

「つていうかエリツてこんななんですか？」

「待機状態だからだ。専用機などは、アクセサリーなどになる。」

「んじやあ俺はエリク学園に通う訳だな。」

「んで俺は、どうで生活すればいい?あと俺の名前はエリク。」

「そうだな、エリクは全寮制だ。一人部屋でも用意しておく。名前については、適当に考えとけ。」

「わかりました。」

「そういや、あんたと昨日のメガネの人の名前知らんかったな。」

「織斑千冬だ。お前の教師になる。もう一人は、山田麻耶だ。副担任だ。」

「そういやあ 昨日少し考えたんだが、俺並行世界やらなんやらから来たんかもしれん。信じたくないが。」

「つていうかエリツてこんななんですか？」

「私達もそういう仮説も考えたんだが。」

「まつ、信じられるような話じゃないからな。」

「そうだな。」

「んじゃあ俺はこれを覚えますよ。」

「分かった、それではな。」

ガラツ

織斑千冬は出ていき保健室に一人になった。

「んああ よし…覚えるか…」

「…無理だあ。」

「はあ んでこれってホントに…なんかなあ？」

ドッグタグ
T-Sを首にかけ

「何これ。前こいつぱい出でてきたー。」

「あつつかのウイングが出てきて

「あつー。何でネクストの装備がいっぱい書いてあるー。」

「じつじつ、あれが俺のHISなのか?」

機体の情報を見て、

「やうこやジマばくね……つて無害……あの口ジマが無害だとー。」

「やまつまつ なにこれ夢…夢なら覚めてえー」

「しかもなんかカラーディORCAのメンバーの機体が全部あるし、操縦者の名前もあるし」

「あつ俺が切れてボコしたやつヴァオーッて言つんだあ。Hインプレムカブトムシかあ」（現実逃避中）

「ん?パッケージって何」

分厚い本を見て

「追加武装的なモンか。」

「あつー俺のやついくつか最初からパッケージあるじゅん つてアームズフォートオオオオ！」

「やまこやまこ、スピリット・オブ・マザーウィルとかあるし、アソラ もー?」

「うわーなにこのキチガイ、バグつてんじゃね。」

「 もひこやだ、本読む。」

あきらめて本読みました。

「あ、あ、あ いつちも無理い、覚えるかよこんなの。」

「 なにがひしゆー?」

首輪付させ、分厚い本をとせざる現実逃避しながら読んだ。

第3話（後書き）

今回も、読んでもらってありがとうございました。

来週あたりからテストがあるので更新遅れます。
1日一作が、3・4日で1作になると思います。

ほんとういません。

第4話（前書き）

第4話投稿です。

やつぱり駄文です。
これからもよろしくお願いします。

第4話

エミ学園保健室

・首輪付き s-i-r-e -

わつき織斑先生（織斑さんとか千冬先生と読んだら出席簿で殴られまくった）が来て、

「今日は特に何もないが、ここから出るなよ。」と言われたので名前を決めようと思つ。

別にあの分厚い本を読みたくないとかそういう訳じゃナイヨ。

（名前s-i-r-e、ほとんとん）

（そのまま首輪付きは、駄目だよなあ
リンクスも無理があるじ。）

（頸 くび 和月 わつき とか！）

（いや…………なんかいやだ）

（うへへん ビーべーほとんとん）

（アスピナ・A・トーラスとか「AはアクアビットのA」変態のところは名前にしたくないな。うん）

（ウルナ・クラー・アムはどうだ……たしかラテン語で意味が
尺骨と頭蓋骨だった気が……やめよう）

(「じーしょじーしょせんとじーじーしょ。）

(「フーーんレイヴンはゞいだつー···そりやこいな候補に入
れよ。）

(「じーじーん。」)

ガラッ

「誰ですか？」

「私だ。」

「織斑先生ですか。じーじーなんです。」に何か用でも？」

「いや、とくにはないが。」

「モーですか。 んで今、名前決めてるんですけど候補聞きました。」

「聞かせてもらひ。 どうこうのが出たんだ？」

「まあ、そのまま首輪付か」

「却下だ。」

「何ですか。どこがダメなんですか！」

「全部だ。まあ今前でいいにじやないか。」

「まあ、やつですか。」

「で次はなんだ。」

「あれ？ 気になるんですか？」

「最初からそれだとくべでもないのばかりな気がしてな。」

「さすがにそれはないですよ。」

「自分の名前くらいちゃんと考えますよ。…………たぶん…………」

「はあ、で次はなんだ。」

「次は・・・頸 和月で「駄目だ。」これもダメですか？」

「当たり前だ。 やつをと同じじゃないか。」

「少し違いますよ。 今回は、苗字が、頸 名前が、和月ですよ。発音も違います。」

「それでもだ。」

「うう 次はアスピナ・A・トーラスです。」

「まあ それは何とかなるんじゃないかな。」

「そしてAは、アクアビットで由来は俺のところの壊滅した企業でものすごい変態な企業です。」

トーラスは、そのアクアビットの技術者を取り入れた企業です。」

「こちらも変態な企業です。」

「それを言わなければ前よりはマシだったんだが、それを聞いて思つたよ、駄目だ。」

「まあこれはもとよりするつもつあつませんでしたから。」

で次はウルナ・クラーナはどうですか？」

「駄目だ。知つていいが、それの意味くらいは。」

「じゃ、じゃあリストで、レイヴンはどうですか。これはさすがにいいですね！」

「また名前じゃ ないが、もつそれでいい。それで……。」

「分かりましたー。んじゃあこれから自分のことはレイヴンと名乗りますね。」

「ああ。」

「では改めまして、よろしくお願ひします。織斑先生。」

「ああ、わかつた。であればもつ覚えたが、レイヴン。」

「あの分厚いのですか？」

「もつだ。」

「あ、あのまだ6割ほどしか。」

「今日中に覚える。いいな。」

「了解いたしました、織斑先生！」

「じゃあ、それではな。」

「はい」

ガラッ

「うううううううううう

「これ今日中に覚えるとか無理だよう。」

「…………はあ、まつがんばりますか！」パラパラ

レイヴンは時折、現実逃避をしたり悶えたりしながら分厚い本を読んでいた。

(…………… もう…………… パー…ル…………… しても…………… いいよ…ね……………)

第4話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
これからも頑張らせてもらうのでよろしくお願いします。
次回は、たぶん紹介に入ると思います。

主人公紹介 + 機体説明（前書き）

投稿です。

次からたぶん原作です。

別にこれは読まなくてもいいです。
ほとんど適当に書いたことなので。

あと駄文です。

これからも駄文のままだと思いますが、よろしくお願ひします。

主人公紹介 + 機体説明

中にACFaの装備が全部入っているというキチガイ仕様で

IS ストレイド

機体説明

ACFaの企業連ルートのビッグ・ボックス戦でメルツェルと相打ちになつて死亡という設定になつています。
ちなみにワイン・D・ファンションがヴァオーに瞬殺されたのは、ヴァオーのガトリングとバズーカがうまいこと当たつたからです。首輪付きのカラードランクはN.O.・6ということになつてしましたが、強さ的にはものすごい頑張つてぎりぎりN.O.・2のワイン・D・ファンション勝てるか勝てないか、というくらいです。

名前	レイヴン
年齢	18歳
趣味	読書
好き	ストレイド 寝ること
嫌い	アスピナ、トーラス、アクアビットの技術者達 夢に出てきたソルディオス・アンサラ

す。

ゴジマはもちろん無害です。

シールドエネルギーはAPをものすくなくした感じで、普通のエネルギーはゴジマの力で回復していきます。

ビッグ・ボックス戦+今の機体アセン

R ARMUNIT : MR - R102

L ARMUNIT : 03 - MOTORKOBRA

R BACKUNIT : DEARBORN 02

L BACKUNIT : KAMAL

SHOULDERUNIT : NODATA

R HANGERUNIT : NODATA

L HANGERUNIT : NODATA

HEAD : H11 - LATONA

CORE : SOLUH - CORE

ARMS : AM - LAHIRE

とこうアセンになつてこます。

LEGS	· 03 - A ALIYAH / L
FCS	· FS - HOGHRE
GENERATOR	· GN - JUDITH
MAINBOOSTER	· CB - RACHEL
BACKBOOSTER	· BB11 - LATONA
SIDEBOOSTER	· AB - HOROFERNES
OVEREDBOOSTER	· I - RIGEL / AO
STABILIZER	
HEADTOP	· HD - LANCHEL - OP
HEAD	· GAN01 - SS - HSSO
ARMS R	· GAN01 - SS - ASO
ARMS L	· GAN01 - SS - ASO
LEGS MIDDLE	· GAN01 - SS - LMSO

あとこのアセンは弱いと思います。理由は、ほとんど適当に作ったからです。

色はメインを真っ黒にして、JURUJURUにすべしんだ赤をつけるだけです。

次はパッケージについてです。パッケージは、AFにします。一応すこし説明します。

まず、ギガベースです。これはたぶん本編に出します。
大きさもあまり大きすぎず、長距離砲撃もできて、水陸両用だからです。

次にランドクラブ、これはたぶん出しません。

理由は特徴が足が多いくらいです。長距離砲撃も、ギガベースみたいのがACF aにもありませんでしたし。
でもソルティオス・オービットは出します。
あの変態企業が作ったあれは出したいです。

次はステイグロです。こいつは100パーセント出しません。

なぜなら、HSへの攻撃方法がミサイルのみになるからです。

大型レーザーブレードは、絶対当たりませんし、海上での高機動も相手がずっと浮遊していすので意味ありませんし、まず海上戦は今のところ福音戦しかないからです。

グレートウォールは、出したいけれどあの列車みたいのを走らせる場所がないと思うので出さないと思います。でも場所を思いついたら出すつもりです。

個人的にあの大量ミサイルとガトリンググレネード砲は好きなので。

イクリップスは出したいです。飛んでいるし武装がハイレーーザーとミサイルで使えそうなので。
でも一夏特訓のときくらいにしか出しません。あの便座もどきな、ずいこ脆弱いので。

カブラカンも出したいです。気に入ってるんであるのかつこい形。ミサイルを壊したら何もできないと思わせといてのあの自律兵器の大群。すごいかつこよくないですか？

ジヒットは、出さないと思います。出す場面が思いつかないので。

スピリット・オブ・マザーワイルは出したいけど、
あのでかいのを出すほど広い場所つてありましたか？

アンサラ は出します。一応ACFaのラスボス的存在なんで、
(とつつきで一発だつたけど)
ミサイルもたくさんあつてレーザーや近づこてきたときのアサルト
アーマーなど脆弱いけど武装は、ちゃんととしているので。

これで今のところの説明はたぶん終わりです。これからも増えていくと思います。

主人公紹介 + 機体説明（後書き）

最後まで読んでもらってありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

第5話（前書き）

今回から、原作入ります。
これからも駄文になると 思いますが、よろしくお願いします。

第5話

HS学園一年一組教室

・レイヴン side・

「全員揃つてますねー。それじゃあ HS リームルーム はじめますよー」

「それでは始めるよー、一年間よろしくおねがいしますね」

「・・・・・・・・・・・・」

（うわーなにあれ無言かよ、かわいそすぎるだら。 まあ俺もだけ
ど。）

「じゃ、じゃあ血口紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

（しかも前の男子、織斑一夏だけ？あれひでえだろ。最前列のど
真ん中なんて、周りの注目集めすぎるし、そして俺は、一番後ろ
の窓際だ。近くのしか見てこないから楽だぜ。織斑一夏君、ご愁傷様
そして俺は、徹夜での本覚えたから眠いんだぜー！というわけで
寝るzzzzzz）

- 一夏 side -

(これは……想像以上にきつい……)

なぜなら俺ともう一人以外全員女子だからだ。
もう一人は、たぶん後ろの方だと思うが、

(なんで俺は、真ん中&最前列なんだ。めちゃくちゃ目立つ上に否
が応でも注目を浴びるじゃないか
いいなあもう一人の方は、後ろで……)

はあと小さくため息をつき、ちらりと窓際の方に目をやる。

「…………」

助けを求めて見たら薄情なことに窓の方へふいっと顔をそらした。

(なんてやつだ。もしかしたら嫌われているのか?)

「…………くん。織斑一夏くんっ」

(ほんとに嫌われているのかなあ。嫌われるようなことをした記憶
はなかったはず。

6年ぶりに再会したのに……)

「おーり！ むーりーくんつー織斑ー 夏くんつー！」

声が裏返つてしまつた。案の定笑い声が聞こえてきた。恥ずかしい。ともかくクラスは、俺ともう一人の2人。他の生徒二十九名。副担任も女性。担任は女性らしい、まだ来ていないからだそうだ。なにしてんだろうね。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、「あ」から始
まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、『お』、ゴメンね？自
己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに、謝らなくても…………つていうが自己紹介しますか、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

そして俺は、しつかりと立つて、後ろを振り向く。

(うつ きついつ しかももう一人の男子? は寝てるし。)

一気に視線が集まり、全員（・ー）が「ひきを見てくる、あの見捨ててきた薄情な第でさう、横田で見てくる。

「えー……えつと織斑一夏です。よろしくお願ひします。」

儀礼的に頭を下げる、頭を上げる つてなんだよ。その『もつといろいろ喋つてよ』的な視線は。

そしてこの『これで終わりじゃないよね？』的な空氣はなんなんだ。

（喋ることなんてそんなにないんだぞ。そして）

「…………」

だらだらと肺中に流れる汗を感じる。

（どうすればいい、そして何を言えばいい）

「…………」

（いかん、マズイ。）（）で黙つていたままだと『暗にやつ』のレッテルを貼られてしまつ。）

俺は呼吸を一度やめ、そして再度吸い、思い切つて口にした。

「以上です。」

がたたつ

がたたつ

(ん……なんだ? まあいいや。ZZZZZ)

「あ、、あのー」

パンツ!

「いつ

!?

「げえつ、 関羽!-?」

「誰が三國志の英雄か、 馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち一年生を進級するまでに使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言つことこはまはいかYESで答える。逆らつてもいいが、言つことは聞け。」

「キヤ…………一千冬様、本物の千冬様よ。」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

（ぬああああ 寝れないよ。………………………）

「…………毎年毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きやあああああつ！お姉様！もっと叱つて！罵つて！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらなこように躰をして！」

（ビクッ・・・・・ンンンンン）

「で。挨拶も満足にできんのか、お前は

「いや、千冬姉、俺は

」

パンツ！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「で……」

カツカツカツ

(ん？ なんか近づいてくる。 まあいいや……)

ガスンツ！

「おい起きひ。 いつまで寝ている」

「い、だあつ！？ 何！？ 何が起きたの！？ 頭痛い！？」 キ

ヨロキヨロ

なぜかみんながこっちを見てくる。

「何が起きたの」

「おい、血几口紹介しろ。」

「えつ 無視？ まあいいけど」

レイヴンは立ち、

「どうもーはじめまして。 レイヴンとこーまーす。 名前につい
ては気にしないでください。」

趣味は、読書で、好きなことは寝ることです。
HISについては初心者なのでこれからもよろしくおねがいしまー
す。」

「語尾を伸ばすな」

ガスン

「痛い…………」「グスン

キーイングーンカーンゴーン

「さあ、S H R ショートホームルーム は終わりだ。諸君いらにまは」これからHISの基礎知識を半月で覚えてもらひ。

その後は実修だが、基本動作は、半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事しろ。よくなくても返事しろ、私の言葉には返事をしろ」

（うあ 暴君じやん。すげえなあ。
もう無理眠い……）

「席に着け、馬鹿者。そこには寝よつとするな。」

（ええっ なぜばれたし。）

そしてSHRは、終わった。

（ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ）

第5話（後書き）

ほんとにすいません。

駄文にものすごいなつたと思います。

いろいろごめんなさい。

今週から、だんだん更新速度が遅くなつていいくと思います。
すいません。

第6話（前書き）

すいません少し遅れてしましました。
勉強などがあつて、時間がありませんでした。
あとまた駄文です。よろしくお願いします。

・レイヴン side -

一時間目のI S 基礎理論授業（たゞがに授業のときは起きた）が終わって今は休み時間。

（あ～きついよぅ なんか視線がすごい。 つてか他のクラスの人とかめつちや来てるし。）

そして雰囲気がすごい『あなた話しかけなさいよ』とか『ちょっとまさか抜け駆けする気じやないでしうね』的な感じですごい混沌^{オスカ}になつていると織斑一夏がこつちに来て

「初めまして。 織斑一夏です。」

「ああ 僕はレイヴンだ。 男は俺らだけなんだ別に敬語じやなくてもいいよ。」

「わかった。 僕のことば、一夏つて呼んでくれ」

「ん 僕の」とせ好きに読んでもいいって構わないと。

「じゃあ、これからレコードを手渡さないつよ。

「えじあおれからよみじく頼む、一夏」

「むくじくめぐらす」

「…………ちよつといいか」

「ん? なんだ?」 「…………篇?」

「一夏に用か?」

「はー、ちよつと一夏。」

「別に行つてもここと。一夏、僕の」とせ氣にしないでいいから
行つてこ。」

あと篠ノ内さん敬語じゃなくともこか。」

「わかつた、行くぞ一夏」

「お、お」

(よし！寝るか！ 視線がすごいし、もう耐えられない・・・・・)

ISについての授業中

山田先生が、教科書を読んでいる。

一応、レイヴンは、徹夜で参考書は読んでなんとなく覚えているから大丈夫だが

(一夏、何キヨロキヨロしたり、頭抱えてんだよ。)

（あ、山田先生に分からぬ」と、さういふと聞かれて

る。)

「先生……」

「はい、織斑くん……」

「ほとんど全部わかりません!」

(「うおっ すげえ、一夏まじすげえよ）

「え……ぜ、全部、ですか……？」

(山田先生がすじこに困っているよ。どいつも一夏)

「え、えっと織斑以外で、今の段階わからないうつて人はどれくらい
いますか?」

俺は手を挙げない。

一夏が絶望したような顔で見てくる。ものすじこ見てくる。

「レイヴンくんは、大丈夫ですか？」

一 夏がまだ見てくる。

「はい、一通り読んみましたから。（ドヤッ

セ）に一 夏が絶望したよ」

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の隅で控えていた織斑先生が訊いてくる。

「古い電話帳と間違えて捨てました。」

（すげえ まじすげえよ一 夏）

パンツ！

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者」

「レイヴン、こいつに参考書を貸してやれ」

「はい、そのつもりです。」

「織斑、一週間で覚える、いいな」

「い、いや、一週間での分厚さはむけっと……」

「やれと言つてこる」ギロツ

(「わつなにあれ」わつ)

「……はい。やります」

「EVAはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥か凌ぐ。そういう『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起つる。そうしないための基礎知識と訓練だ。

理解できなくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ。」

一夏が一瞬いやそうな顔をした。

(おひ 望んできたわけじゃない的な顔しとるし。 まあ、わかる

けど。)

「…………貴様、『自分は望んでここにいるわけじゃない』なんて思つてゐるな？」

一夏が驚いた表情をする。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。

それすら放棄するなら、まず人であること辞めることだな」

（せんせー もうここにほとんど人じゃないのがいるナビジうすればいいですかー？）

「…………

このあと特に何もなく授業が再開した、強いて言つなら山田先生がこけたくらいであった。

ちなみにレイヴンは考え事の最中、ものすごい頑張つてポーカーフエイスをしていたため織斑先生には気づかなかつた。

第6話（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

ついでに書うなら、

自分は中3ですので受験やらなんやらの面倒事が多くなつてしまつたので更新速度がだんだん遅くなつたりすると思います。
ほんとにすみません。

これからもよろしくお願いします。

第7話（前書き）

7話投稿です。
馱文です。

HS学園教室

・レイヴン side・

「ちょっと、よろしくて?」

一時間目の休み時間、俺が一夏と話しているところなり声をかけられた。

「へ?」 「なんだ」

話しかけてきたのは金髪ドリルだった。

「まあ! なんですか、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度といつものがあるんではないかしら?」

(なんだ、ここつづるやこな)

「すまんな。お前のことなんてなんも知らん。」

一 夏が軽くイリツこじるし、

「わたくしを知らない？」のセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。ようしくてよ。」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずつこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたつ、本氣でおっしゃこ出すのーー？」

はあ説明してやるか。

「国の代表の候補の人だ。 読めばわかるだろ?」

「そういわれねばそうだ。」

「わー・ヒートなのですわ。」

あつ、復活した。復活はやいなあさすが代表候補生（笑）

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすことだけでも奇跡……幸運なのです。その現実をもう少しうかいでしていただける?」

「そつか、それはラッキーだ」

「まあいい、消えろ 興味もない。」

「…………馬鹿にしますの?」

「はい、そのつもりです。」

「大体、あなたたちTANについて何も知らないくせに、よくこの学

園に入れましたわね。男でISを使えると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね

「俺に何かを期待されてもこまるんだが

「そーだそーだ。」

「ふん、まあでも？私は優秀ですから、あなた方のような人間にも優しく教えてあげますわ」

これが優しさというものの、初めて知ったよ。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ、泣いて頼まれたら考えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？ ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ。」

「あれ？ 僕も僕も倒したぞ教官。」

「は…………？」

「あ、一夏お前も倒したんだ。」

「レイヴンもか？」

まだ名前が首輪付きのときのこと思い出す。
なんか織斑先生が来て、入試をしてもう1回的ない」と言つてきて、誰
だか分らなかつたけど、戦つた。
ちなみにアセンは、グレーティッシュニアでガトリングとバズーカを連
射しまくつた。

「マッハでハチの巣にしてやつたぜ。」

「わ、わたくしじだけだと聞きましたが？」

「女子ではつてオチじやないのか？」

「そーなんじやね？ なんかありえそつだし。」

「ビシッ。

「つ、つまり、わたくしじだけではないと…………？」

「いや、知らないけど」

「俺、俺はとつあこず倒しただ。」

「あなた達！あなた達も教育を倒したってのー。」

「うふ、まあ。 たぶん」

「せひあからむじめん倒したって。」

「たぶん！？ たぶんってビビリこいつ意味かしらーーー？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「！」これが落ち着いていられ?????????

キーンゴーンカーンゴーン。

「う……………！またあとできますわ！逃げないことにねーよへつてー。」

「あとで来なくともいいぞー。むしろ来るなよー。よくないからなー。」

1、2時間目と違つて山田先生ではなく、織斑先生が教壇に立つて
いる。

何か大事なことでもあるのか山田先生まで、ノートを持っている。

「それではこの時間には実践で使用する各種装備の特性について説明するが、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めておく。」

「クラス代表とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。

ちなみにクラス代表戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで

さわざわと教室が色めき立つ。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

(一夏、面倒事押し付けられてるし)

「私は、レイヴンさんを推薦しますー。」

(はつ ? 僕 ?)

「候補者は織斑一夏とレイヴンか…………他にないか?自薦他薦は問わないぞ」

「「お、俺ー!？」」

「俺はそんなのやるつもつないこー。」

「俺もだー。」

織斑先生に睨まれた。

「自薦他薦は問わないと叫んだ。他薦されたものに若狭権などない。」

「

「い、いやでも?????????」

「待つてくださいー 納得がいきませんわー。」

まだ反論を続けよつした一夏を、突然甲高い声が遮つた。
セシリ亞が文句を言い続ける。

「そのような選出は認めません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

わたくし、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

（よし！金髪ドリル！そのまま仕事引き受けろ！俺から注意を逸らすんだ！）コソコソ

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ 私はこのような島国までEIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

（あと少しだ！金髪ドリル！もう少しで俺は楽になれる！）コソコソ

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で??????」

カチン

（ん？ どうしたんだろう？ 一夏）コソコソ

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なつ
-?
」

（やつちやつたよ、一夏君。あみはもう少しで仕事無くなつたのに。俺はまだ大丈夫だがなー）コソコソ

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますのー？」

（アーティスト名） ピアノ

「決闘ですわ！」

「おひ。ニニギ。四の五の言ひゆつわかりやす」

（よつしゃ！きいいたあああああ！
これで俺は大丈夫な筈、みんな一夏と金髪ドリルに意識が言行つ
てるし！）

でレイヴンが「じゃあしてみたの聞こへん」とやがてやめときなよとかの話は進み、

「わい、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで2回行つ。」

「織斑先生。」

「なんだ?」

「何で2回なんですか?」

「後ひで」(それをしてこいるやつを見つめ)

(パンパンパンパンパン オレハジコウダー イヒーヒ) パン

「「あ」」

(…………ん? なんかおかしいぞ。) パンパン

「レイヴン、お前も試合だ。」

「えつ！？ ま、待つてくださいよ。みんな忘れてたじゃないですかー俺のことー。」

「お前も、推薦されていたからな。」

「なぜだアアアアー！」

「いわゆるセー」

ガスンと出席簿が飛んで来て当たった。

「痛い。」グスン

「やつこつわけだ。織斑とオルコット、レイヴンは用意をしておくれ。それでは授業を始める。」

(あと少しだったの……あと少しだったの……)

そのまま授業は進んでいった。

第7話（後書き）

次また遅くなるとおもこます。
すいません。

テストがすこし近くなつてきたので、少しの間更新を止めます。

いろいろとすいません。

ただでさえ駄文なのに。

ほんとにすいませんでした。

次は、11月30日以降に更新します。

重ねて言いますが、ほんとうにすいませんでした

あと時数稼ぎです

お知らせ（後書き）

本当にすいません。

第8話（前書き）

どうも久しぶりです。そしてすいませんでした。

もつにかとすいません。遅くなつてしまつて申し訳ありません。一応、あした中3の期末テストなんですが、いろいろめんどくなつてしまつたので投稿しました。

勉強をしようと思ったんですけど、めんどくなつてしまつて結局ほとんぢやりませんでした。

もう、『え？…テスト？なにそれ？食えんの？』ってこうなります。

あと今回、すこしだけ書き方えてみました。駄文ですがよろしくお願いします。

ほんとにむづかしくませんでした。

HS学園教室

放課後、俺はたいしてある」ともないのとつあこずばかーつとしている。

周りがさやこさやこと小声で地味に立つるので寝るに寝れないが、寝ようと努力していると

山田先生が来た。

「ああ、織斑くんとレイヴンくん。まだ教室にいたんですね。よかつたです。」

一夏とは少し離れていたので、疑問に思いつつ、近づいておへ。

「はい?」 「どうしたんですか?」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

やつまつて部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

「俺の部屋、決まってないんじゃなかつたですか?前に聞いた話だ

「…週間は自宅から通勤してもいいって話でしたけど、

「俺は保健室から毎日行くと思ってたんですけど。」

「そ うなん です け ど、事 情 が 事 情 な ので 一 時 的 な 处 置 と し て 部 屋 割
りを 無理 やり 変更 し た み た い で す。

「2室で一人部屋です。」

「山田先生、荷物は一回家に帰らないと準備できなのですですし、今日はもう帰つていですか？」

俺はもとより荷物無いしなあ。どうしたよ？

「あ、いえ、荷物なら?????」

「私が手配しておいてやつた。ありがたく思え」

おおう、織斑先生いつの間に。

「ど、どうもあつがとくやうやこやあ……」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろ?」

少くない、なんかいろいろ。あとめつちや大雑把だし。

「織斑先生、俺もう部屋に行つていいですか? 眠くて眠くてもう寝たいんですよ。」

実はもうギリギリなのだよ。眠くてやべえや。

「まだ話がある。もう少し待つんで。」

「はい、わかりました」

「眠こ眠こやせばこやせばこ眠こ眠こやばこ

「時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂で取つてください。」

ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけれど……えっと、その、織斑くんは今のところ使えません」

「え、なんですか?」

「一夏、それ本気で言つてゐるのか？」の状況で

「へ？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

やつと理解したか一夏。つて「つか」の状況でわからないものもある意味すげえな。

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ だつ、ダメですよ！」

「い、いや入りたくないです」

そりやー普通にダメだろ。ここではいっ、ものすごい入りたいですって言える人っているのか？

「ええつ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問

題なよつな……」

山田先生、ちやんと意味わかつてゐるのかなあ。

「織斑くん、男にしか興味ないのかしら……？」

「それはそれ……でいいわね」

「中学生時代の交友関係を洗つて！…すぐにね…明後日までには裏付けとつて」

サササツ

やばい！あれには近づいたらダメだ！なんかいけない気がする！

「お、おーーーレイヴン何で離れてつてるんだよ」

「いや、なんでもない。大丈夫。ほんとだから。たとえ友人が同性愛でも気にならないから、

でも「ゴメンね。俺さすがに男に恋愛感情抱けないからさ。今までどつりだつたらいいけど。

ゲイヴンとか無理なんだ。すこしトラウマだから。」

「ちげえよー同性愛じやねえよーあとゲイヴンつてなんだよー」

パアン！

「織斑、静かにしる。」

「……すこませんでした。織斑先生」

トラウマつていうのは前、夢の中でなんか古王?つていう人が『付き合わないか?』って言つて迫つて来たり、あのジョラルドさんと戦つて途中で『大胆に過ぎたな、体に聞く事もある』とか言つて迫られたりしてまじで怖かったんだ、でそれ以降、同性愛とかゲイヴィンとかマジで無理になつたんだ……。

「え、えつと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。

織斑くんとレイヴンくん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くつちやダメですよ」

むりじゃね。道草くつちやダメつていうけど五十メートルくらいしかないよね。

行くところなんていよね?

「ふー……」

一夏がため息ついたるし、周囲もまだいろいろ騒がしいし

「はあ、一夏寮行くか？」

「もうだな。早くこの視線から解放されたいし。」

「じゃ、こいつか。」

「ああ、視線がきつかつたが、
？？？？これでやつと……部屋でゆつくつ、できる。
> 135935-4390 <
こんな感じの表情になつてゐる。？」

今は寮の廊下で部屋を田指していく。

「えーと、ここか1025室だな。レイヴン、俺部屋ここっぽいからまたな」

「ん、またな。」

ガチャ

ん~と俺の部屋はたしか1012室だから、もつがよつと先かあ~

ふあ～あ　あ～眠みい。早く寝てえなあ。
一人部屋あ～ゆつくりできる～

「？？？？？」
「？？？？」
「？」

ん?なんか叫び声が聞こえる…………まつ、いつか。
ん?おつ、あつたあつた1012室だな。

ガチヤ

おおお～広いなあ～ ベッドもふもふしてる～
いいなあ いいなあずつとここここたいなあ。
ベッドもふもふもふ

うお？？？たす？？？

h
?

なんだ?

なんだ？なんだ？なんか近づいとるぞ？

「…………おおおおおおおお…………たすけてッ！－レイヴンッ！－」

八
?

力チャ力チャ力チャ力チャ

助けてニヤカン! ナア開けぐれ! ハイ! ハイ!

「なんでだよ。」

ガチヤガチヤガチヤガチヤ

「早く早くほんとお願いします！助けてください！開けてください！」

「はああ、しょうがねえなあ。」

何があつたんだろう？

ガチヤ

「ありがとうー！レイヴンー恩に着るー。」

「んで、何があつたんだ？そんなに慌てて。」

「いや、部屋に行つたら幼馴染がいた??????」

「」

「すいません。レイヴンさん、一夏来てませんか？」

ん？また別のが来たぞ？

「げつ、第一」

「ちよつと待つひ」

ガチャ

「じつしたんだ？篠ノ内さん？あと敬語じやななくてもいいのよ。」

「あこせさん。一夏じでこあせんか？」

「ニヌナビヘなんで？」

「ひよと端廻の」と

「ふうへん おーこ一夏あー篠ノ内を来とのー

「ハハハ

「玉ひなこと無理やつ連れだす」

「わ、わかったからー行くからー

「おー、わかった。篠ノ内を、一夏来るつ。

「わかった、ありがとうございます。」

「んー敬語じゃなくてもこのー。まつこーせ。」

「う」

「行つて来い一夏、篠ノ之さんも一夏もまた明日な。」

「はい、また明日。」

「また明日な、レイヴン」

「また明日な~」

ガチャ

おお~ねむいねむい早く寝たい

バタン

も……つ……無……理……
Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z

第8話（後書き）

最後まで読んでもらってありがとうございました。
ほんとに駄文でしたけどありがとうございます。
テストでめんどいですね。勉強やりたくないです。
次からも駄文になると思っていますがこれからもよろしくお願ひします。

ああ、AC5早く出ないかなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4031y/>

首輪付きが学園入り

2011年11月27日21時46分発行